

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 洪^{ほん} 聖^{すん} 牧^{もく}

本論文は、序章を含む四章十節からなる。神話学の立場から古代日本の太陽神の変遷を探り、天皇家の太陽神＝アマテラス信仰がどのように確立していったのかを、記紀、風土記、民間伝承などの資料をもとに追尋しようとした論である。

第一章「古代日本の動物太陽神」は、アマテラス以前の太陽神が、様々な地域において普遍的に祀られていた事実を示し、その上でその太陽神がしばしば動物神として現れていたことを、ヤタガラス、サルタビコ、オホモノヌシの例によって明らかにする。サルタビコがアメノウズメに屈服したとする従来の説を否定し、服従の対象はむしろニニギにあり、そこに伊勢志摩の原始太陽神が、新たに浮上した太陽神アマテラスの御子に屈服するという、太陽神の交代が示されているとする。また、三輪山の神オホモノヌシを蛇身の太陽神とし、王朝交代の過程で、もともと河内・和泉の渡来系陶工集団と深くかかわる大神氏が河内王朝を支持し、同氏の保持する「苧環型」の神婚伝承を、三輪山のオホモノヌシと融合させて、その神裔を称したとする理解は、きわめて先鋭な問題提起となっている。

第二章「アマテラス成立以前の日本の太陽神」は、アマテラス以前の太陽神を具体的に考察する。ヒルメを女性の太陽神と捉える一方、ヒルコを男性の太陽神であったとする。その上で、アマテラス信仰の発展に伴い、ヒルコは生み損ないの子として定位されるにいたったとする。本章でもっとも注目すべきは、太陽神の渡海伝承を扱った論で、アメノヒボコ伝承を『三国史記』『三国遺事』などと比較し、応神天皇の伝承がアメノヒボコ伝承にもとづいて構想されたこと、そこに朝鮮半島における太陽神の観念とその渡来伝承とが組み込まれていることを指摘する。古代の日本と朝鮮半島との密接な関係が、比較神話学の視点から綿密に検討されており、つよい説得性をもつ。

第三章「伊勢太陽神の変遷」は、天皇家によって皇祖神アマテラスが形象される以前の伊勢の太陽神の原像を、サルタビコ、イセツヒコ、イセノオホカミの伝承から考察し、伊勢神宮の成立過程を探っている。イセノオホカミは、これまでアマテラスと同神と見るのが定説であったが、これを古い伊勢の太陽神と見る新たな理解を示している。きわめて重要な問題提起であり、今後の検討の糸口となる意味をもつ。内宮・外宮からなる伊勢神宮の成立過程は複雑だが、外宮の祭神トヨウケノカミを、外宮の禰宜度会氏がもともと祀る太陽神アメノヒワケと関連づけて論じたところに新たな視点がうかがえる。

本論文は、以上のように、皇祖神アマテラスの誕生にいたる古代日本の太陽神の変遷を探り、その大きな見取り図を提示することに成功している。なお論ずべき点はあるにしても、今後の研究に大きく寄与する意義をもつと評価しうる。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。